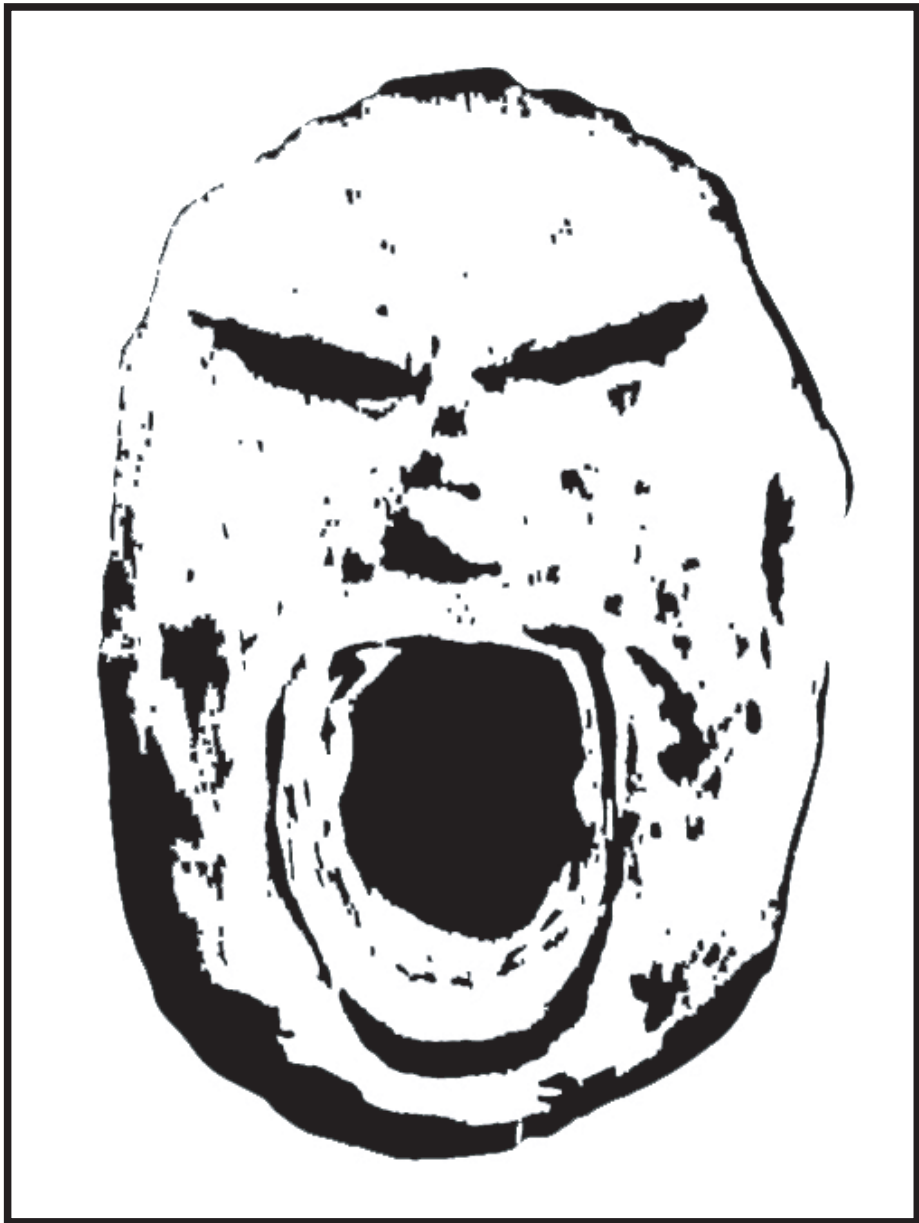


動かぬ海

一人芝居「天の魚」2009年東大駒場公演号



不知火グループ

2009

「水俣」から「駒場」へ <いのち>から問われる「一般教育」の追求

最首 悟(元東大教養学部助手／和光大学名誉教授)

「天の魚」は、水俣病になって働けなくなった息子と胎児性水俣病の孫をかかえた老漁師の語りである。役者は仮面をかぶっているが、その仮面のせいもあって、自慢話でもあり繰り言でもあり過去の美化でもある老漁師の語りを聞いていると、しだいに〈いのち〉がそこらじゅうにあるかのような気がしてくる。〈いのち〉は幾重もの階層の厚みをもって、そして個別の形と働きをもって充満しており、ヒトはその大分上の階層で特別な働きを持っているなどと自分で定義しているのだが、もし最上層にいると思うならばなおのこと、ヒトは次になってゆくもの下地であり、いつか消えゆく階層であることがわきまえられるはずである。

- ・ 〈いのち〉は次から次になりゆくもので、どんな形と働きになりゆくか、〈いのち〉にもわからないのである。
- ・ 大腸菌もある中間層にいる。未来を含めるとヒトもある中間層にいる。細菌からヒトまで、〈いのち〉の共通性を考えると、個別的な〈いのち〉は〈いのち〉の分有で、分有の在り方がとほうもない多様さをもつということになる。〈いのち〉の分有は〈いのち〉の具体的なあり方と言い換えられるが、では〈いのち〉は抽象的な在り方なのか、原理なのかといわれると困ってしまう。それはちょうど神（ゴッド）は抽象的存在か、あるいは原理なのかと問うと困ってしまうのに似ている。神（ゴッド）はあまねく在り臨在するのである。ただし透明で厚みを感じさせない。〈いのち〉は不透明で明るくそこらじゅうに粒状に満ちているので、霧が光っているかのようなようである。ただし霧の一粒一粒はみんなちがう個性的な〈いのち〉である。ものがみずからを生成し成ってゆく力を持つとは〈いのち〉のことであって、だから原子だろうが水であろうが石であろうが波がしらであろうが、みんな〈いのち〉である。
- ・ そのような「天の魚」が駒場寮の跡地で演じられる。となれば思い起こすのは「一般教育」である。新制（新生）大学の「一般教育」の場として注目されたのが東大教養学部である。矢内原忠雄ぬきにそのことは語れないが、「一般教育」の理念に〈いのち〉を盛り込んだのは上原専禄（一橋大学長）だった。上原専禄は「歴史的省察の新対象」（一九四七）で、新しい時代に面して、個体生命の価値を問う思考と行為にわたる限りなき自己試練に一身を投ぜざるを得なく、それは価値の存廃を中心問題とするところの生命感覚の苦悶だとした。そして「大学教育の人文化」（一九四八）で、「一般教育」のカリキュラムに、アメリカ教育使節団が提示した自然・人文・社会の3系列に生物を加えた。アメリカでも希少なシカゴ大のカリキュラムを参考にしたのだが、これは特筆すべきことで、自然科学の生物学というよりは、生きもの学にふさわしく、「飲・食・住といった生活活動の具体的な在り方が特種ヒト的な有様になっている」（廣松渉の言い方）ことの考究から広がり絞られてくる、おそらくヒトには測りがたい〈いのち〉の価値についての総合学の芽をはらんでいたのである。
- ・ しかし現実にはこのような「一般教育」が行われるべくもなく、もう一つの柱の、みずから成ってゆくものへの「解放的配慮」も、専門学部と経団連の圧力によって締め付けられ、「一般教育」はあつという間に基礎教育、入門教育化し、学生は「パンキョウ」と称して馬鹿にするようになる。「一般教育」の場がかろうじて維持されたのは、皮肉なことに旧制高校の寮が学生の貧困を踏まえて存続した大学においてであって、寮も含めてそのままキャンパスに移行した東大教養学部はその典型であった。もとより旧制高校の寮生気質は鼻もちならないものであった。駒場寮生にもそれは引き継がれ、通学生にとっては鼻つまみ的であったけれど、狂と遊と野蛮と反抗をもってみずから成るものの気概を立ち昇らせていた。それは〈いのち〉は統御されないということの表れでもあったのである。
- ・ 一九九一年、「一般教育」は廃止された。それに伴って東大教学部は駒場寮廃寮の方針を打ち出した。五年後大学側は駒場寮廃止を宣言、学生は新寮生募集を続けるが、二〇〇一年大学は五七〇名の警備員と教職員で学生を追い出し、寮を打ち壊した。遡れば一九六二年大学管理法の引き下げの条件として、東大が音頭を取って学生の自治と大学の自治を切り離れたことが、大学崩壊の一步だった。二〇〇九年東大の新学長は新産業社会への貢献を謳ったが、ここまで大学が委縮する相面において、それはかえって、「学」なるものが深奥において、収まりのつかない〈いのち〉から促されていることの気づきにつながりかねないのである。加藤登紀子もその一員であるけれど、駒場寮廃止に抵抗した者として、幻の「一般教育」を追求するものとして、「天の魚」駒場公演にかかわりたいと思う。

砂田明という役者がいた

星 埜 守之(東大総合文化研究科准教授)

私が砂田明の舞台を最初に見たのは、一九八〇年の十二月、東京大学文学部学生ホールでの公演の折である。「海よ子どもらよ」と銘打たれた二部構成の一人芝居で、第一部は歌あり踊りありの大道芸風の舞台「海の胎」、そして、第二部が石牟礼道子『苦海浄土』の一章をもとに、老人が水俣病に冒された一家の来歴を切々と語る仮面劇、現代夢幻能「天の魚」である。砂田の全国を股にかけての旅芝居はその一年ほど前からスタートしていたが、私はたまたま東京大学公演の企画・組織・設営の中心になっていた友人から声をかけられたことから、当日の舞台設営等の手伝いという形でこの芝居にほんの少しだけかかわり、初めて砂田の公演を、しかもごく間近で見るという機会を与えられたのである。

沖縄風のリズムと音階に乗った主題歌「いのちのうた」（「海のなかに 母がある／母のなかに 海がある…」）で賑やかに開幕し、巡礼姿での最初の水俣行の折にも朗読されたという詩／檄文「起ちなはれ」の朗読、水俣月の浦の胎児性水俣病の少女への思いを籠めたマンドリン弾き語りの唄「月の浦の乙女」と詩「月の浦のジャンヌ・ダルク」、そして夫婦揃ってのユーモラスな踊り「ムツゴロウどん」と、重苦しいテーマと軽快な歌舞の緩急を織り交ぜて第一部が終わる。

十分ほどの休憩ののちに、会場の明かりが徐々に落ち、「天の魚」と記されためくりの上にひと時のこつてから消える。真っ暗な闇が観客を包む。闇のなかに流れるナレーション―「一九六四年。日本中が東京オリンピックで沸き立っていた昭和三九年の初秋、わたくしは百間港に近い水俣市江添の丘の上に、江津野空太郎少年とその一家をたずねました…」やがて、琵琶のゆっくりとした響きとともに、口を丸く空けた石の色とも木の色ともわかたぬ面をつけた黒衣の登場人物が、舞台下手から亡霊のように姿をあらわす。胎児性水俣病患者として生を享けた空太郎少年の祖父である江津野老…

全体で2時間をゆうに超える舞台からそのとき私がなにを受け取り、自分のなかになにが生まれたのか。もう二十五年以上前のことなので（いや、むしろ、二十五年もたったにもかかわらず）あまりうまく語ることはできそうもない。闇のなかで語られる言葉に耳をそばだて、仮面や仕草のなかに宿る幻の光景に目を見張りながら、言い知れぬ慄きにとらわれている二十代の若者が、そこにいたことだけは確かなのだが。ただ、記憶のなかをもう少し探してみると、仮面劇だけではなく、生身の砂田の華奢な（というふうに見えた）肉体から搾り出される叫びのようなもの、とくに劇の第一部で朗読された「起ちなはれ」、あるいは「月の浦のジャンヌ・ダルク」といった詩も、やはり私のなかのなにかを大きくゆずぶったのだと思う。

もちろん、舞台のメインイベントともいえる「天の魚」の、黒衣で身体を隠し、仮面に言葉を語らせる演技のどこか荘厳ささえ感じさせる時間が大きな衝撃をもたらしたのはまぎれもない事実であって、これも初めて耳で触れる天草言葉に乗せられて、水俣の「苦海」と「浄土」がそこに鮮やかに幻視されたはずである。それにくらべて、大道芸らしい猥雑さとあまりに性急に水俣を体現しようとするような悲壮さを併せもった第一部は、水俣の人々の測り知ることのできない受苦に思いを潜める人々の目には、なにか危ういものを感じさせかねないかもしれない。だがそれでも、「起ちなはれ」で砂田明がみずからの決意を吐露し、あらゆる人々の決起を促すときの、疼くようなその言葉のひとつひとつが、当時ナイーブな（と言っておこう）学生だった私の胸に容赦なく突き刺さったことが、いまや徐々にはっきりと甦ってくるようだ。「天の魚」の仮面の向こうに深々と広がる世界からうける静かな衝撃と、いま目の前に「旅芸人」という身体をそなえて存在している砂田明その人と一仮面と生身とが表裏一体となった、砂田明という謎とでもいうものの、強くひきつけられたのだと思う。芝居のあとの交流会に参加しながら、近いうちに砂田の住む水俣市袋神川を訪ねることを心に決めていたことも、そんな思いに駆られてのことだったのかもしれない。

『ひろがる「水俣」の思い』作品社所収の論文から一部抜粋

ひとり芝居「天の魚」

2009年5月13日(水)14日(木)15日(金)

駒場小空間(東京大学駒場キャンパス構内)

STORY:

1964年初秋の熊本県水俣市。“あねさん”こと石牟礼道子は百間港に近い水俣市江添の丘の上に、江津野奎太郎少年とその一家をたずねる。百間港は、ながく馬刀瀉とよばれてきた貝の宝庫で、江戸の初期から美味をもってきた「水俣塩」の発祥地となった入江であった。しかし、それからほぼ300年あとの水俣病の爆心地となったところである。江津野家は、その百間港の片隅を舟溜まりとする一本釣りの専業漁家である。一家の大黒柱で、見るからに古い先みじかい江津野老を中心に、その妻、そのひとり息子の清人、そして彼の三人の息子で暮らしている。清人はそれとわかる水俣病で、彼のあいだの子でその時9歳の奎太郎少年も胎児性の患者であった。水俣病は発生当初から奇病や伝染病として恐れられ、その後もながく「貧乏漁師のなる病気」として、忌避されつづけてきた。だから、めったにこない客人を得て江津野老はとても機嫌がよい。“あねさん”は老人に江津野家の家宝である「九竜権現さま」を拝ませてほしいとねだる。この家宝は江津野老が天草から水俣に流れてくる時、親から譲り受けた運気の神さまであった。上機嫌な江津野老はこの家宝に加え、神棚の神さまたちを次から次へと“あねさん”に紹介すると、焼酎をちびちびと始め、酔いどれ気分で海と空とのあいだにあった自らの半生を語り出す。そして、それを奎太郎少年の野ぶどうの粒のような黒いぼちりした眸が見つめているのだった……。

キャスト:

【出演】川島 宏知

【効果】あねさん声役

砂田 エミ子(砂田氏お連れ合い)

琵琶 田原 順子

笛 設楽 瞬山

スタッフ:

【原作】石牟礼道子『苦海浄土』

【構成】砂田明

【潤色】川島宏知

【演出】岡村春彦

【舞台監督】小野瀬弥彦 / 袖谷昌洋

【照明】小澤明彦

【音響】井出比呂之

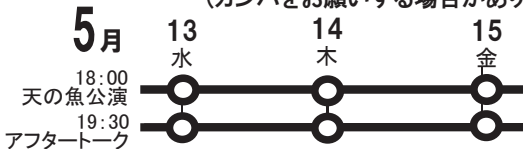
【製作】東京不知火座

(Homepage: <http://www.tennoio.jp/> E-mail: info@tennoio.jp)

【企画・運営】「不知火グループ」(代表:最首悟、星埜守之)

(事務局:最首塾気付 <http://www.geocities.jp/saishjuku/>)

スケジュール: 全日程、入場無料
(カンパをお願いする場合があります)



* 整理券を16時45分から配布

お問い合わせ:

ホームページ: http://www.geocities.jp/saishjuku/tennoio_2009/tennoio.html

電話: 090-9971-6642 (世話人丹波) E-mail: saishjuku@yahoo.co.jp

協賛:

有限会社けるふ農場

D.K.Zeit Co.Ltd

マザーズグループ(夢市場株式会社、株式会社にんじん、マザーズブランド、株式会社はまなす、マザーズマクロビオス)



アフタートーク:

5月13日(水)

加藤登紀子(歌手)×最首悟(元東京大学教養学部助手)

『苦海浄土』と東京大学 二つの“1969”

5月14日(木)

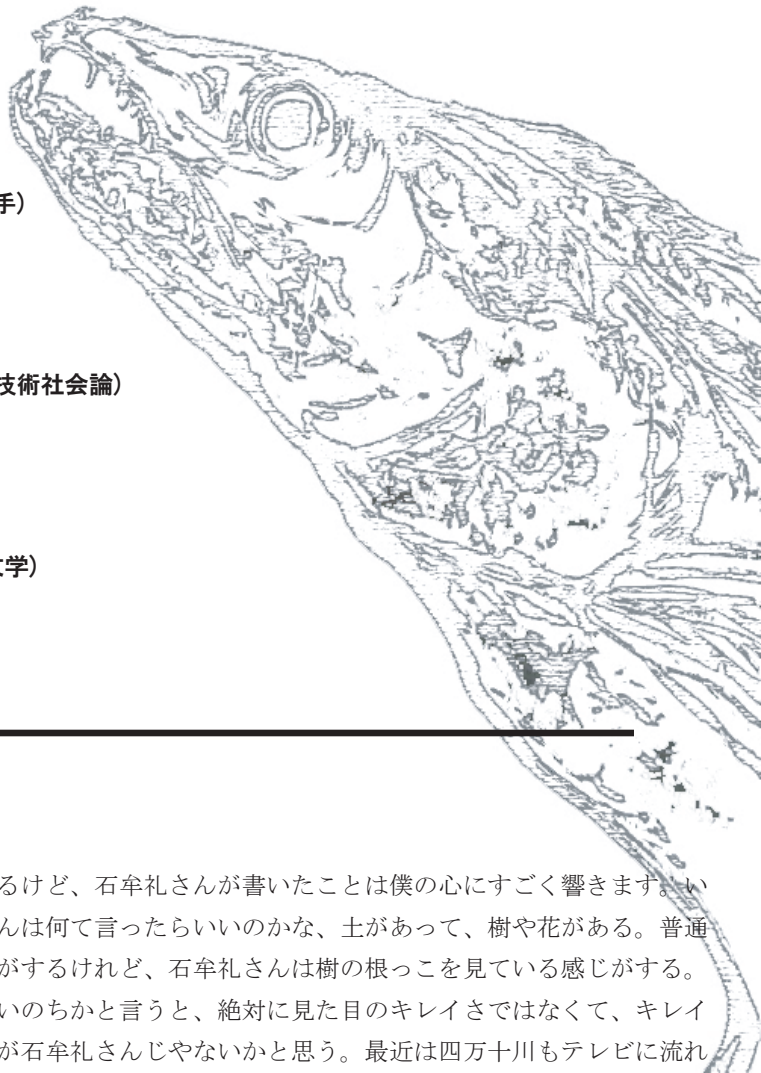
立岩真也(社会学者)×鬼頭秀一(環境倫理学/科学技術社会論)

“1969”から考え継ぐ

5月15日(金)

今福龍太(文化人類学者)×星埜守之(フランス語圏文学)

石牟礼道子文学と群島-世界論



出演:川島宏知・江津野老

僕の出身である高知と不知大海とは風土の違いはあるけど、石牟礼さんが書いたことは僕の心にすごく響きます。いのちって何だろうなど考えるよね。そして、石牟礼さんは何て言ったらいいのかな、土があって、樹や花がある。普通みんなは土から上の目に映る部分だけしか見ない感じがするけれど、石牟礼さんは樹の根っこを見ている感じがする。根っこの存在は樹によって違うわけだけれども、何がいのちかと言うと、絶対に見た目のキレイさではなくて、キレイな花を咲かせる根っこの方だと思う。それが分かるのが石牟礼さんじゃないかと思う。最近は四万十川もテレビに流れるものだから有名になってね、それで観光客が来るとそれを相手に商売する人が出てくるわけだよ。そうするとエビなんかもねこそぎ獲ってしまうからいなくなる。昔が懐かしい。

だからそう言った意味でも、石牟礼さんの「天の魚」というのはやる意味があると思う。どこかで気づかせてくれるものがあるんじゃないかな。「あねさん。魚は天のくれらすもんでござす。天のくれらすもんをただで、わが要ると思うしことってその目を暮らす」という船上のシーンがまさにそう。沖の潮で米を研ぎ、「かかさま、いっちょ、やろうかい、ちゅうて、先ずかかに(酒を)さす」の「先ず」という言葉がね。かかに対する愛情みたいなものが「先ず」という言葉にね、僕はすごく感じる。あてのない、賭けにも似た漁のあと、まして、大漁のあとの心地良い疲労感が人の心を優しくさせるのか、それとも、周りかすべて自然の中ではほんの点にすぎない二人が、そこに存在することによってそうさせるのか。かかさまと自然にそう呼ばさせる、そして、この先ずもそうさせるのかな、と思います。これはまさに天上世界みたいなものですね。こういった自然の恵みが人間を素直にさせると思う。

『ひろがる「水俣」の思い 水俣五〇年』所収のインタビューより抜粋

プロフィール:

高知県出身宿毛市出身。本名・小松敏宏。舞台芸術学院の学生時代に砂田明と出会い、1970年「劇・苦海浄土」の公演に出演。その後劇団三十人会を経て現在各方面で活動。

主な舞台出演に『ガラスの動物園』『三人姉妹』『終わりに見た街』など。映画に『郷愁』『宮沢賢治～その愛』『虹の岬』『狗神』『ヴィタール』『ゆれる』など。テレビドラマに『マチベン』『御宿かわせみ第三章』『元禄繚乱』『徳川慶善』『スチュワーデス物語』など。他にラジオドラマ、ナレーション等多数。

アフタートーク・ゲスト紹介

5月13日(水) 加藤登紀子(歌手)×最首悟(元東大教養学部助手／和光大学名誉教授)

加藤 登紀子(かとう ときこ)

1943年ハルビン生まれ。1965年東京大学在学中、第2回日本アマチュアシャンソンコンクールに優勝し歌手デビュー。1966年「赤い風船」でレコード大賞新人賞、1969年「ひとり寝の子守唄」、1971年「知床旅情」でレコード大賞歌唱賞を受賞。以後、60枚以上のアルバムと多くのヒット曲を世に送り出してきた。

2009年は島健とのシャントゥーズシリーズ3作品のベストセレクション「薔薇と恋のうた」を4月22日にリリースする。夏には6月13日より「Begin again」ツアーを全国10カ所にて行う。

また、地球環境問題にも積極的に取り組み、1997年、WWFジャパン(世界自然保護基金日本委員会)評議員に就任したのに続き、2000年10月にはUNEP(国連環境計画)親善大使に任命された。アジアやオセアニア各地を精力的に訪れ、自らの目で見た自然環境の現状を広く伝えるほか、音楽を通じた交流を重ねている。

2008年4月、国連総会議場(ニューヨーク)にてUNEP親善大使としての活動報告とLIVEを行う。国内では、千葉県鴨川市の「鴨川自然王国」を拠点として、若い世代とともに循環型社会の実現に向けて活動を続けている。

「以前、石牟礼道子さんに会いに熊本まで行きました。その際に石牟礼さんは、「田舎の人たちには声がありますよ、声は最後の自然、最後の強みです。私のような少し都会に足をつっ込んだような半端な人間には余計に大事です。草木といえども、みな、物語をもっている。人間にもありますよ」とおっしゃったんですね。

人はひとりずつ男でも女でも、今や男も女も本当に近くなってきたと思いますけれども、詩を書くように生きればイイと思うんです。かたちの見えない国家やグローバルな地球というものに捕えられて、一人の人間、一人の生き物、一つの生き物から始まる物語は本当に小さくなってしまったと思います。でも、私は最初に生まれた瞬間から、このいのちの一刻一刻を紡いで華やいでいく。ひたすらひたすら一瞬を華やいでいく。もっともっと一生懸命に生きられたら、それが正解だと思うんですね。男であれ女であれ同じ」。

『ひろがる「水俣」の思い 水俣五〇年』所収の講演より一部抜粋

最首 悟(さいしゅ さとる)

1936年福島県生まれ、千葉県に育つ。東京大学理学部動物学科博士課程中退後、1967年同大学教養学部助手になる。1994年退職。恵泉女子大学を経て、2003年より和光大学人間関係学部人間関係学科教授。現在、和光大学名誉教授、予備校講師。この間、1968年東京大学全学共闘会議助手共闘に参加。1977年第一次不知火海総合学術調査団に参加、1981年より第二次調査団団長。著書に『生あるものは皆この海を染まり』(新曜社、1984年)、『明日もまた今日のごとく』(どうぶつ社、1988年)、『水俣の海底から』(京都・水俣病を告発する会、1991年)、『星子が居る』(1998年、世織書房)、『ひろがる「水俣」の思い 水俣五〇年』(2007年、作品社)など。

「私たちが入り込めないにしても、もともと健康とは対になっていない、つまり健康という考えがない病気の世界というのがあって、そこに住んでいる人たちがいるのだ。石牟礼道子の世界は、

祈るべき天と思えど天の病む

であり、奈太郎少年は胎児性水俣病でどのようにしても治らない。天と私たちは地続きである。どこからどこまでも病んでいるのだ。病んでいる世界では祈りはない。祈りは現状からの脱出の願いだからだ。脱出と絡んでいるなら、希望もない。でも脱出と絡まない希望はある。脱出は往々にして目的であるけれど、詩人は「目的もない僕だけど、希望は胸に高鳴っていた」(中原中也)と言っている。

ずっとずっと病み続ける。そのなかで、そうであるならそのようにと、「さようなら」と、別れることも、微笑みあうことも、慈しみあうこともできる。そしてきっと治る、きっと脱出できると思って、それゆえに喜怒哀楽に振り回される人たちを、もっと泣いたらいい、もっと怒ったらいい、もっと愚痴をこぼしたらいいと、幼子に対するように、あやすのである。

ひょっとすると石牟礼道子も奈太郎少年にあやされているのかも知れない。「天の病む」って、ことさら言うこともないのに、言わなければ済まないあなたも、やはりかわいげのある人だ、と奈太郎少年の黒いぼつちりした目は語っているのかも知れない。仏さんの微笑む目、慈しむ目も、ずっとずっと病む世界に居たために、そういう目になったのかも知れず、もはや奈太郎少年の目と区別が付かない」。

『ひろがる「水俣」の思い 水俣五〇年』所収の論文より一部抜粋

アフタートーク・ゲスト紹介

5月14日(木) 立岩真也(社会学者)×鬼頭秀一(科学技術社会論／環境倫理学)

立岩 真也(たていわ しんや)

1960年佐渡島生まれ。東京大学大学院社会学研究科博士課程修了。信州大学医療技術短期大学助教授などを経て、現在、立命館大学大学院先端総合学術研究科教授。社会学を専攻。近著に『良い死』『唯の生』(以上筑摩書房)などがある。

「水俣や様々のところで起こった事件とともに現われてきた社会の理解、変革の主張が、簒奪され弱くされているように思ってきた。自然が奪われているとか、技術が人間を害しているとか、そのようなことを、それらの事態に直面した人はたしかに言った。あるいは今起こっていることはその延長線上にあると思える。つまり、死を肯定する人は、技術偏重に抗して、より人間的な、自然な死を、専門家に決められるのでない自分自身の死を求めているのだと言う。ならば同じではないか。そしてそれはかつては少数の人たちの主張だったのだが、広く普及し、ようやく多くの人々のものとなっているようでもある。それは、かつて当然でなかった当然のことが当然のことになったということなのだろうか。〔中略〕

会ってしまうことが肯定をもたらすなど、まったく楽天的な話ではあって、それはことの一面でしかない。それに直面してすぐに、あるいは人によっては——とくに介助する人として——長く接していて疲れてしまって、否定することがある。〔中略〕

他方、悲惨と困難が一般論として語られる時、生じるかもしれないことへの恐れとして想像される時には、否定はその人の存在の否定に及ぶことがある。また逆に、あるいはあまりに重く自分のことになった時、あるいは重すぎる関係者になった時にも、この二つの対し方は連続的である。二種類の人間がいるわけではない。そしてもちろん、実際に会うこと接することが嫌悪を強めることもある。その人の姿・形に実際にたじろいだりもする。しかし、それでも、知ってしまった人たちの中に、その人の生を支えようとする人がいたのは事実だ。

その人たちは、人が生きることができないことがあったり苦痛のもとに置かれていることを指弾してきた。その状態がよいと思っただけではまったくない。行動は悲惨から始まった。だが、その後起こったこと、起こらざるをえなかったことは、その人たちと暮らしていったりすることだった。暮らしはしなないとしても、支援やらなにやらの関係で、その人に面することになった。その人が亡くなっていく過程につきあったり、あるいは生きていく過程につきあってきた。すると、いくらかは異なってもくる。その人たちを苦しめたことについて、その人たちの暮らしを困難にしたことについて、そのことを責めてはいると同時に、その人を肯定はしている。その批判・指弾は、その人が生きることを否定しない。すると、その悲惨をそのままに使うのは間違っていると思うことになる。

これは矛盾ではない。死や苦痛や不便をもたらした者たちは、それだけで十分に糾弾されるに値する。その者たちを追及するのはよい。ただ、第一に、そのことを言うために、その不幸をつりあげる必要が出てくることがあるとしたら、それはなにかその人たちに對して失礼なことであるように思えるということだ。だから、それはしない方がよいと思うようになったということだ。その状態をよいものとして肯定しているわけではない。しかしそれは死を肯定することではない。その存在を肯定するからそれに死をもたらすものを責めることになる。

立岩真也『良い死』筑摩書房より一部抜粋

鬼頭 秀一(きとう しゅういち)

1951年名古屋生まれ。東京大学大学院理学系研究科(科学史・科学基礎論)博士課程単位取得。青森公立大学、東京農工大学農学部教授を経て、現在、東京大学大学院新領域創成科学研究科教授。科学技術社会学を軸に、学際的な研究成果を視野に入れた新しい環境学を構想している。著書に『自然保護を問いなおす』(単著、筑摩書房、1996)、『ひろがる「水俣」の思い 水俣五〇年』(共著、作品社、2007)、『自然再生のための生物多様性モニタリング』(共編、東京大学出版会、2007)、『岩波 応用倫理学講義 2 環境』(共著、岩波書店、2004)ほか多数。

「しかし、そのような「地球」的視点による政策論的な視点の環境問題の把握の浸透の中で、一方で、覆い隠し見えなくされた問題がある。それは、「水俣」に代表される公害問題である。一九七〇年代の半ばから、公害問題に対する表面的な法制度の整備が進んだこともあり、特に一九八〇年代以後に公害問題はまるで解決されたと言わんばかりに、環境問題の時代に移行したとされた。〔中略〕

公害問題は被害者と加害者がはっきりしているが、環境問題は誰もが加害者になり、誰もが被害者になるとして、環境問題こそ本質的で困難な問題だとされた。〔中略〕

公害問題が環境問題に代えられていったことは、加害者と被害者が特定できなくなったという表層的な意味ではない。それは、政策論的な環境問題の視点が社会の中を席卷していったということなのである。問題を政策担当者が見るような形で上から捉える視点からは、公害の「被害」という被害者の個別的問題が見えなくなり、抽象的な「被害」に対する上からの「解決」に重点が置かれるようになった。政策論的な視点からは、地べたを這いずり回って生きている個別の人間の公害の「被害」も含めた全体的な「生」は見えないし、問題にされない。〔中略〕

被害者の「生」の個別性にこだわり、「被害」を全体として捉える中から、公害の本質に迫る視点を「抵抗の原理の視点」として、「政策論的な視点」と対比的に捉えたい。「政策論的な視点」は、全体を上からの視点で捉えようとする。それゆえ、全体を鳥瞰した形で普遍的な理論を提案しそこで解決をはかろうとする。そこにおいては、個別の人間の思いよりも、全体のシステムとして整合的に機能することが重要である。それに対して、「抵抗の原理の視点」は、それぞれの人間の「生」の「個別性」を全体として捉えようとしている視点である。それぞれの人間の「生」の個別性を独自のものとして捉え、それぞれの「生」をかけがえのないものとして重視するという意味では多元性といってもいいと思われる。そこでは地べたを這いずり回って生きている人間、個々人にとっての意味とか思いというものが重視される。時と場合によって、この政策論的な視点と抵抗の原理の視点は相補う場合もあるが、往々にして前者の視点は後者の視点を抑圧する。抑圧してしまうからこそ、個別の「生」の問題は、「抵抗の原理」として立てなければならない。

『ひろがる「水俣」の思い 水俣五〇年』所収の論文より一部抜粋

アフタートーク・ゲスト紹介

5月15日(金) 今福龍太(文化人類学者)×星埜守之(フランス語圏文学)

今福 龍太(いまふく りゅうた)

1955年東京生まれ。文化人類学者。東京外国語大学教授。2002年より遊動型の野外学舎「奄美自由大学」主宰。近著に『群島—世界論』(岩波書店、2008)、『ミニマ・グラシア』(岩波書店、2008)、『サンパウロへのサウダージ』(C. レヴィ=ストロースと共著、みすず書房、2008)などがある。

「波打ち際に、世界の縁が静かに打ち寄せている。

陸の方にはなく、海の方に向かって啓かれる世界——。

汀を媒介に現代の時空間を反転させれば、世界は群島だ。群島世界では、珊瑚礁の浅瀬やヒカゲヘゴの鬱蒼たる森が、人間や鰐やシオマネキの網膜に、光と影のおりなす幾本もの筋を複雑に刻んだ。大王郷子の林立する丘が、決死の逃亡を企てる奴隷の身体に叡知の起伏を植えつけた。この起伏ひとつひとつ、筋や縞の一本一本が記憶となり、感情の中枢を刺戟する脈動となり、ヴァイタルな生命力の根源となった。生命は、生きつづけようとする本質的な活力に溢れ、同時に自らの生死にかかわる決定的な判断をいつも群島世界の存続のために捧げた。

いまを覆う、外なる、内なる廃墟。海洋交通によって開けた「近代」という前進する歴史の逆説。海を統括することで大陸原理による世界支配を数世紀にわたって続けた国家の逆説。それらを痛苦とともに負って、歴史を海の姿に反転させること。陸上に具現された秩序や体系ではなく、海面下に沈められていた統一と共鳴関係を歓喜の記憶の波打ち際に浮上させるために。

水のように浸透してゆく本。砂のように流れてゆく本。珊瑚の産卵のように無限定に拡がり、世界の汀の海底に着床してゆく文字。笛か太鼓の音楽のように不意に立ちあられ、ふたたび生まれた森へと還ってゆくテキスト。確実さへの希望は、偶有性のなかにしかない。言葉もまた、自然が示すこの偶有性の潮流と、森の仄かな朝露と、淡い曙光の揺らぎに身をゆだねていなければならない。群島世界の言葉には、総合もなく、包括もない。

海が、上昇気流が、川が、泉が、偶有性の水滴を世界に雨として浴びせかける。サネンの花卉の奥にたまる楕円形の雨滴。その可変的なレンズに写り込んだ戦火の小宇宙を想像しながら、群島は自らの意思と感情のもとに世界の更新に向けて待機する」。

今福龍太「海の凡例」『群島—世界論』岩波書店

星埜 守之(ほしの もりゆき)

1958年、アメリカ合衆国ペンシルヴァニア州生まれ。東京大学大学院人文科学研究科博士課程中退。白百合女子大学教授を経て、現在、東京大学大学院総合文化研究科准教授。シュルレアリスム研究から出発し、現在はカリブ海やニューカレドニアなどで勃興するフランス語圏文学の研究もしくは紹介を主にする。訳書は、アンドレ・ブルトン『魔術的芸術』(河出書房新社、共訳)、パトリック・シャモワゾー『テキサコ』(平凡社)、アンドレイ・マキーヌ『フランスの遺言集』(水声社)、エリー・フォール『形体の精神 I』(国書刊行会)、『月光浴——ハイチ短編集』(国書刊行会、共編訳)など多数ある。

「もともとこの文章は、今福龍太氏の『群島 - 世界論』の書評として書くはずのものだった。しかし、遠く周縁に世界の果てとしてある「島」を望見する大陸的なまなざしの遠近法を、ある種の時間錯誤、空間錯誤によって幾重にも折り返し、近いものを遠くに置き、また遠いものを近くに手繰り寄せながら、すべての世界の果てを世界の無数の中心として響きあわせるこの驚くべき書物について、「書評」的な言葉がどうしてもうまく出てこなかった。いわゆる書評とは違う応答をいざなう本——ぼくにとってはこの本がそういう一冊だったようだ。せめて、今福氏がこの本の末尾に書きつけている言葉を励ましとして受け取り、ぼくがいま付き合いはじめているひとつの島について何かを書くことで、書評に代わる応答としたい。そう思ってこの拙い文章を草した次第である。

「重要でないものはなにもない」のだから。」。

星埜守之「書評今福龍太『群島—世界論』 ヌメアから「群島—世界」へ」『現代詩手帖』2009. 5

§ 不知火グループ入会資格

特になし。年齢、性別、国籍、その他一切問わず。

§ 特典

焼酎がのめること。いろいろな人達と話ができること。面白い話がきけること。などなど。

§ 不知火グループ

人数：20-30名（幽霊部員 20名ぐらい） 年代：10代-70代

やっていること：学問をさかさまに考える問学。今年中にまた水俣論集を出したい。

（希望は胸に高鳴っていた）

ご あ ん な い

不知火グループの事務所を現在置いている最首塾では、毎月第三土曜日に例会を開催しています。最首塾は、かつて東大駒場で生物の万年助手をしていた最首悟さんが東京大学を退職されたのに合わせて、始まったもので、その母体は元祖・不知火グループでした。最首塾例会は1994年に始まり、2009年4月で73回おこなわれました。

最首塾例会の会場は毎回変わりますが、主に文京区民センターを利用しています。そのあとは近くの飲み屋で一杯です。

花見と暑気払い、忘年会が一年のうちで一番重要な行事です。

お酒に興味のある方、下記までご連絡ください。

丹波

電話 090-9971-6642（丹波）／E-MAIL saishjuku@yahoo.co.jp

編集後記

「動かぬ海」が20年ぶりぐらいに出てしまった。題字は多分、最首悟さんによる。元祖・不知火グループの発起人は映画監督の故佐藤真さんで、かつては駒場の最首悟さんの部屋（6号館4階、415A）でみな集まっていたようだ。

建物内でくさやを焼いたりして、とても迷惑千万なやつらだったとのこと。

○○

動かぬ海という家郷がわたしのテーマなのだ。たとえ致命的な毒を注入されても、動くことのできな
い原郷とは、文明の何に光を当るのであろうか。

（石牟礼道子「海はまだ光り」）

表紙デザイン 中田千絵／丹波博紀

動かぬ海

2009年5月13日 不知火グループ発行
東京都渋谷区恵比寿3-38-22 d
最首塾世話人宅（丹波博紀） 気付